

# エチオピア農耕社会における人—ウシ関係に関する研究

## ——在来有畜農業の可能性——

平成 19 年入学

派遣先国：エチオピア

田中 利和

キーワード：エチオピア中央高原、在来有畜農業、牛耕、ウシ、都市近郊

### 対象とする問題の概要

エチオピア中央高原付近に暮らすオロモの人々は、農業と家畜の飼養とを結び付け、限られた土地で自給生産的な有畜農業をおこなってきた。彼らにとってウシは重要な生活資源である。例えば去勢牛は、畑の犁耕や穀物の脱穀をおこなう際に不可欠である。雌牛が提供する乳および乳製品は、人びとの食文化を支える重要な食品である。また牛糞は、堆肥や建築資材として有効利用されている。このようにウシは、オロモの人々の生活に深く関わっている。エチオピアの農村研究においては、ウシの所有頭数が世帯の経済的な豊かさの指標として用いられることも多い。これまで、エチオピアにおける人とウシとの多様な関係については、主に牧畜社会を対象に人類学的な研究がなされてきた。しかし、農村社会における人とウシとの関係に焦点をあてた研究はほとんど行われていない。

### 研究目的

本研究の目的は、オロモの人々と家畜との間にみられる様々な関係に焦点をあて、在来の有畜農業システムを畜産学、農学、人類学、歴史学等のさまざまな視点から総合的に検討し、その特質をあきらかにすることにある。また、オロモの人々が伝統的に行ってきた在来有畜農業と、人々がもつ知識・技術を内発的発展や持続的な生業活動の観点から分析・考察することによって、アフリカ型の持続的農業システム可能性を検討することを目指す。

### フィールドワークから得られた知見について

本調査は、ディレドゥラティ村を調査村として選定して、3ヶ月間おこなった。エチオピアの首都アディスアベバから幹線道路沿いに南西へ110キロ行くと、ウォリソとよばれる街がある。ディレドゥラティ村は、ここからさらに南東に4キロの場所にある。今回の派遣では、予備調査として、人々の家畜利用についての基本的なデータを収集することを主たる目的とした。村内のB宅に同居し、同宅を含めて3世帯を対象として、家畜飼養と家畜利用について集中的な調査をおこなった。その結果、以下の知見を得ることができた。

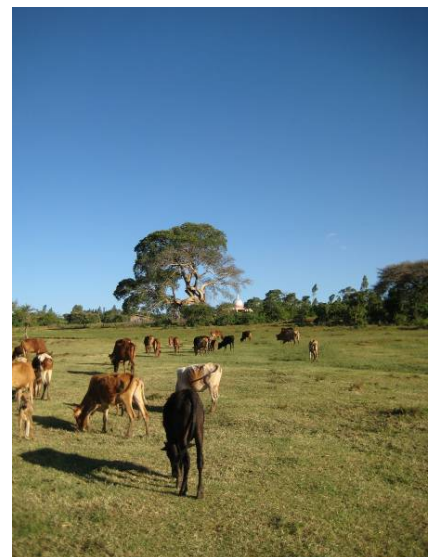


図1. 共同放牧地

1つ目は牧童による家畜の放牧技術と、この季節の放牧ルートについてである。私有の土地と共同放牧地( 図1 )における放牧を観察により明らかにした。2点目は栽培作物と農事暦にそった牛耕についてである。雨季にはいる直前の4月、5月、6月にトウモロコシ、コムギ、ソルガムなどの穀物畑を耕す際に、去勢牛は盛んに利用されていた。また牛耕に用いられる去勢牛は、他の未去勢牛や、雌牛より栄養状態がよく、市場価格も平均的に高いことが明らかになった。さらに調査時期におこなわれたマメ科の播種に際して、在来の牛耕技術( 図2 )を観察することができた。また、そのプロセスのなかで牛が非常に温順化していることも観察された。3点目としては家畜の牛床の配置と、牛糞の利用についてである。牛床は人が日常的に生活している住居の中に存在( 図3 )し、ウシと人が常に生活をともにしていた。また家畜の糞( 図4 )に関しては燃料として利用されるだけでなく、畑に有機物として還元されたり、あるいは建築資材として有効利用されていることが明らかになった。



図2. 牛耕の様子



図3. 人の居住地兼牛床



図4. 牛床の牛糞の収集

### 今後の展開・反省点

今回の調査では、3世帯を対象に集中的に参与観察をおこない、農業経営およびウシの飼養管理に関する基礎的なデータを幅広く収集した。しかしながら、他の世帯に関する調査が十分にできないままに終わった。今後の調査では調査世帯数を増やし、有畜農業の方法に世帯間の相違がどの程度あるのか、また、人々のもつ知識や技術には多様性や偏りがあるのか、といった観点もとりいれながら、村の全体像を把握する。また同時に、人ーウシ関係についての考察を深めていくために、ウシの温順化に関するプロセス、ウシの繁殖に関するデータを収集する。以上により、この地域の在来の有畜農業の全体像を明らかにするとともに、そこで築かれている人ーウシ関係を描き出すことを目指す。またそうして得られた知見をもとに地域農業の可能性を検討していきたい。